

## 最 終 試 験 の 結 果 の 要 旨

神奈川歯科大学大学院歯学研究科 社会歯科 学講座 大 田 順 子 に  
対する最終試験は、主査 荒 川 浩 久 教授、副査 木 本 茂 成 教授、  
副査 槻 木 恵 一 教授により、主論文ならびに関連事項につき口頭試問を  
もって行われた。

その結果、合格と認めた。

主 査 教 授 荒 川 浩 久

副 査 教 授 木 本 茂 成

副 査 教 授 槻 木 恵 一

論 文 審 査 要 旨

Dental health behavior of parents of children using  
non-fluoride toothpaste: a cross-sectional study

神奈川歯科大学大学院歯学研究科

社会歯科学講座 大 田 順 子

(指 導： 平 田 幸 夫 教授)

主 査 教 授 荒 川 浩 久

副 査 教 授 木 本 茂 成

副 査 教 授 槻 木 恵 一

## 論文審査要旨

学位申請論文の概要は、フッ化物配合歯磨剤の普及を図ることを目的に、18の小学校児童の保護者6,069名を対象に、性、学年、歯磨剤（ことにフッ化物配合歯磨剤）使用の有無、歯磨剤の選択理由、歯みがき方法（回数、歯磨剤使用頻度、歯磨剤使用量、洗口方法）、児童のう蝕予防への心がけについて質問紙調査を実施し、フッ化物配合歯磨剤を使用していない保護者の特徴を横断的に検討したものである。その結果、歯磨剤選択理由として、フッ化物配合ではなく歯周病予防を選択している点、歯磨剤の使用頻度が低い点、ならびに歯みがき回数が少ない点が検討すべき問題点であることを示した。

これまでの研究はフッ化物配合歯磨剤を使用している者の特徴から普及戦略を検討していたが、本研究はその逆を狙ったもので、使用していない者を使用に仕向けるという点でユニークなものである。また、研究の倫理性も十分配慮され、研究倫理審査委員会の承認のもと適切に実施されたものと評価した。

研究方法については、まず歯磨剤使用者をフッ化物配合歯磨剤使用者とフッ化物無配合歯磨剤使用者の2群に分けて調査要因の単変量オッズ比を求めて分析した。さらに、学校の種類や自治体の人口密度と平均所得という社会経済要因についても分析要因に加え言及した。また、交絡因子の調整を図るために、マルチレベル（第1レベル：個人、第2レベル：学校）ロジスティック回帰分析を採用したもので、研究デザインも優れている。

分析結果からは、フッ化物無配合歯磨剤の使用者の割合は、歯磨剤選択理由として歯周病予防、口臭対策、歯石予防を挙げた者、また歯磨剤選択理由としてフッ化物配合、低価格、味がよいを挙げなかった者、歯磨剤の使用頻度が時々と回答した者、4～6年生に有意に多かったことが示されたが、フッ化物無配合歯磨剤の使用と児童のう蝕予防のための心がけの間には有意な関連はなかったという。マルチレベルロジスティック回帰分析の結果は、フッ化物無配合歯磨剤の使用は、歯周病予防（オッズ比：1.44）を歯磨剤選択理由に挙げることで、フッ化物配合（0.40）、味がよい（0.49）、低価格（0.50）を歯磨剤選択理由に挙げないこと、および歯磨剤使用頻度が時々（1.39）であることと有意に関連していたことを示した。

児童には歯磨剤自体を使用しない者もいるが、この点については、同じ講座の山本ら（2010年）の研究によってすでに検討されている。学位申請論文では、歯磨剤使用者に限定してフッ化物が配合されていない歯磨剤を使用している児童の特徴を分析したものであり、新たな普及戦略として、保護者に対して、児童にとって歯みがきが重要であることと、う蝕予防対策としてフッ化物配合歯磨剤を使用することが重要であることを啓発することが強調された。

審査時の質疑応答では、18小学校を抽出した根拠、フッ化物無配合歯磨剤使用者の保健意識、小学校低学年より高学年でフッ化物無配合歯磨剤使用者が有意に増加する理由、単変量だけでなく多変量解析を加える意義について質問された。これらに対して学位申請者は、それぞれ北海道から九州までの6ブロックを網羅したこと、フッ化物無配合歯磨剤使用者は歯みがき回数が少ないなど保健意識は以前より低下している可能性のあること、小学校高学年は子ども用の歯磨剤ではなく歯周病予防などの保護者の使用している歯磨剤を使用していること、多変量解析により交絡因子が調整できることの説明があった。さらに本審査委員会は、ほかの関連事項について口頭試問を行い十分な回答が得られることを確認した。以上の結果、本審査委員会は申請者が博士（歯学）の学位に十分値するものと認めた。